

## 主日の説教      ◇C年◇      担当 佐々木 博 神父

聖家族 C年 (15.12.27)

### 「家庭教会を育てる」

#### 家庭は今

去る、2014年の秋、全世界の教会から、代表司教たちが、ヴァチカンに集合しました。それは、今日の<sup>こんにち</sup>世界における家庭の問題について、今、教会が取り組むべき課題は何かを準備するための第3回臨時シノドス（世界代表司教会議：10.5~19）に参加するためでした。実は、そのシノドスは今年の10月に開催された第14回シノドスの準備のためでした。このようにシノドスが二年にわたって続けて開かれたのは、異例のことですが、何よりも、今、教会が家庭について緊急のテーマとして、取り組むべきだからと言えましょう。ですから、今年のシノドスのテーマは、「教会と今日の世界における家庭の召命と使命」でありました。

したがって、本日、全世界の教会と心をつなげて「聖家族の祝日」を祝うにあたって、教会が抱えている家庭の重要課題を踏まえながら「今日のみことば」から新たな力を、もらわなければなりません。

では、早速、第一朗読を振り返ってみましょう。

この箇所は、旧約聖書の前半にある『サムエル記上』からとられております。ちなみに、サムエル記の上下には、サムエルと初代の王のサウル、またサウルと二代目の王ダビデとの様々な争い、嫉妬と権力闘争から、なんと愛と憎しみまでもが語られております。

そこで、今日の箇所に登場するサムエルの母ハンナですが、当時の一夫多妻制度の中、もう一人の妻ペニナにしつこく<sup>いじ</sup>虐められ<sup>いじ</sup>苦しみと悩み多き日々を送っていた女性なおります。このいじめの最大の理由は、ペニナは、既に息子たち、娘たちに恵まれていたのに、ハンナは全く子宝が授からなかつたことでした。とにかく、このような問題を抱えていた家庭環境において、毎年、家族全員でシロにある主の家でいけにえをささげていたのですが、そのたび毎にペニナのこと<sup>いじ</sup>で苦しみ、食事も喉に通らなくなっていたのであります。

とにかく、その苦しみからやっと立ちあがり神殿に入り、悩み嘆いて主に祈り、激しく泣いていたのであります。そして、なんと誓いを神に向かって立てたというのです。『万軍の主よ、はしための苦しみをご覧ください。はしために<sup>みこころ</sup>御心を留め、忘れることなく、男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主におささげし、その子の頭には決して<sup>ひと</sup>かみそりを当てません。』(サムエル上 1.11) (当時の習慣に従って、ナジル人となるの

に、誓願期間中は頭に剃刀<sup>かみそり</sup>を当ててはならなかつた：民数記 64.4 参照)

「ハンナが主の御前であまりにも長く祈っているの、エリ（祭司）は彼女の口もとを注意して見た。ハンナは、心のうちで祈っていて、唇は動いていたが声は聞こえなかつた。エリは彼女が酒によっているのだと思い、彼女に言った。『いつまで酔っているのか。酔いをさましてきなさい。』ハンナは答えた。『いいえ、祭司様、違います。わたしは深い悩みを持った女です。ぶどう酒持強い酒も飲んではおりません。ただ、主の御前に心からの願いを注ぎ出しておりました。はしためを墮落した女だと誤解なさないでください。今まで祈っていたのは、訴えたいこと、苦しいことが多くあるからです。』そこでエリは、『安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願ひことをかなえてくださるように』と言ってそこを離れた。・・・」（サムエル上 1.12-18a）

そして今日の個所につづくのです。

特に、28 節の「この子を主にゆだねます。」というくだりは、まさに、子育ての基本ではないでしょうか。つまり、別な言い方をあえてするならば、「子離れ、親離れ」とでもなりましようか。しかも、それぞれの親子関係において、親が、まず、潔く我が子を主に委ねなければ、子どもの方もなかなか親離れができないで、特に男の子の場合、俗にいうマザコンになりやすいのではないですか。つまり、親が子離れしないと、子どもが、いつまでたっても親離れできなということなのです。

サムエルが、成人してから、最後の士師として重要なリーダーになれたのは、この母親が、まさに、子離れが出来たからと言えましよう。

## 両親はそれに気づかなかつた

次に、今日の福音が語るイエスの 12 歳のときの感動的なエピソードですが、まず、聖家族においてもいわゆる「子の心親知らず」と言えるぎくしゃく親子関係があつたということではないでしょうか。イエスを探して三日もたって、やっと見つけたのですが、親が全く想像外の場面を見て驚き、マリアは早速イエスを叱りました。「なぜこんなことをしてくれました。ご覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」ところが、まさに親が全く思ってもみなかつた返事が、イエスから返ってきたのです。『「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかつたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかつたのですか。しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかつた。」まさに、「子の心親知らず」ではないですか。

けれども、感心なのは、ナザレに聖家族が戻られてからは、確かにイエスは、「両親に仕えてお暮しになった。」ことです。

今日、特に若い家庭では、親子関係があたかも、友達関係のようななれなれしい関係を目にします。実は、すでにモーセがシナイ山で神から授かった掟に、「父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長らく生きることができる。」(出エジプト 20.12) 実は、この第五戒の掟は、ただ単に親子関係に関する掟というよりは、むしろ親を通しての神との関係つまり、宗教生活の秩序を示す掟なのです。つまり、親には、神を地上において代表するあり方が、求められているのです。ですから、親を敬うのは、親が子に対し、すなわち次世代に対して重い責任を担っているからにほかなりません。

## 家庭教会を育てる

ところで、教会は、初代教会の時代から、キリスト者の家庭を「家庭教会」として捉え、教会共同体全体のまさに細胞と捉えてきました。ですから、去る9月に訪米した教皇フランシスコは、その閉会のミサの説教で、キリスト者の家庭こそが、将来の教会を築いて行くまさに鍵を握っていることを強調し、家庭において信仰を育てるためには、見返りを求めない愛を伝えるべきと訴えられ、「それが、わたしたちの家庭、わたしたちの家が、真の家庭教会である所以であり、この家庭教会こそが、信仰が生活になり、生活が信仰になる場なのです。」と熱をこめて訴えられました。

わたしたちのそれぞれの家庭が、まさに「家庭教会」になれるよう、聖家族の取次を願いましょう。